

行為法による保育者養成

——バズ・セッションの理論・技法・実践について——

赤井 美智子*

〔課題〕

バズ・セッション（バズ法、バズ）は、集団討議の方法であり、バズ（buzz）とは元来は英語でハチのブンブンという音を表わす語である。

この方法の特徴は、必要に応じて主題について少人数による短時間の話し合いを繰り返すところにあり、現在社会教育や各種の養成研修活動でかなり活用され、一般化してきている。しかし、その集団運営法には、まだまだ参加者の課題関係をより発展させるための理論、技法に関するたくさんの研究余地が残されていると考える。

筆者は行為法による保育者の資質養成活動を研究課題としているが、行為法、心理劇の理論、技法を基に展開したバズ・セッションのこれまでの実践を分析・考察することによって、より発展的な理論、技法を考究することを目的としたい。

1. バズについての理論的考察

(1) 教授法としてのバズの特性

一般に、保育者養成機関において、講義と実習はそれぞれ時間的、空間的に分離しているが、それらの発展的関係づけのためには、講義内容ばかりでなく、教授法そのものについて、もっと研究されるべきであろう。

バズ法の意義は、多人数の討議にありがちな数名の者だけが、その場を支配したり、大多数の人たちは一言の発言の機会もなかったり、発言しにくい雰囲気になり、大多数の者が終始受動的、外発的態度になりがちな欠点を補うところにある。

多人数の大集団が分化したバズグループになることにより、全員が所属のグループ内で自分の意見を述べ、積極的に討議に参加することが要易に可能となり、それが活動の成立条件となっている。

単に聞くだけでなく、発言しさまざまな役割（司会者、記録者、発表者）責任を積極的に果し、小グループ内で協力することにより、討議に全員が深くかかわり、活動の内容や方向性についても指導者と共に決めてゆけるところにもこの方法の特色がある。

一般に、バズ学習というのは、「学校の教育や指導の

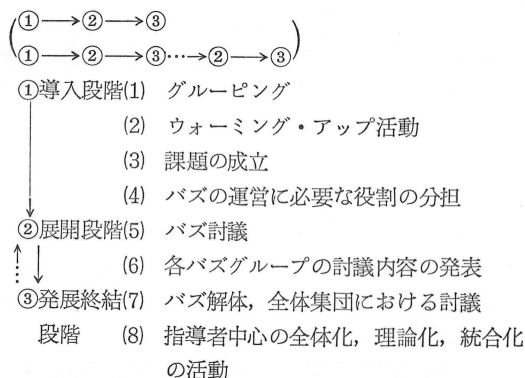
あらゆる領域に導入し、全員を学習活動に積極的に参加させるとともに教育におけるいわゆる人間関係（協力関係）を確立し、教育の全体的な成果をめざすもの」^④であり、教育や指導の方法論として本格的に研究されはじめたのは、1960年以降のことである。Philips, J. b の6・6法はその代表的な方法として、広く活用されている。（6人ずつの分団に分かれて、6分間談合する。その結果をもち寄って、全体で討議する方法である。みづばち集合法ともよばれた。）

(2) バズの展開過程

バズでは、単に順に発言してゆくだけの小人数グループのただの“おしゃべり”という内容へ流されずに、集団と個人の相互作用を発展的に創造するためには、バズのねらい、発展段階を明確化し、それぞれに対応した指導者の技法（集団活動において指導者が活動に参加する物、人、自己それぞれが共にかかわりながら発展する場面状況＝接在共存状況を意図的に設定する＝場面設定方法）が導入される必要がある。

ねらいは、内容からとらえると、課題関係中心のみではなく、メンバーの自己関係（集団内での安定、自己確立、自発性、独自性の発揮）や、対人関係（伝達の方法、協力、援助関係）、関係認識の発展においても成立しえる。それぞれは、関連しあいながら存在するが、ねらいの焦点をどこに置くかは、バズのメンバーや発展段階により多様に変化するものである。

バズの展開過程は、一般的に次のような段階を踏むものである。



* 幼児教育学科

(9) 個別の課題関係のまとめ活動

次に、バズの展開過程を大きく三つの段階に分け、それぞれの活動内容の特色や指導者の機能について述べたい。

①の導入段階は先でのバズの発展のしかたを左右する程、重要な段階である。

(3)の課題の成立のさせ方では、話し合いたい課題を、バズグループごとに提案してもらい、保育者としての認識、行為が深まることをねらって指導者が最終的には決定することもありえる。その際に、メンバーの学生の現在の問題や課題意識と交差する課題内容である必要があり、一方的に指導者が一者関係的に課題を設定しても、十分な成果に結びつくものではない。

(1)のバズ・メンバーの決定（グルーピング）も、バズの生産性を高めるための重要な要素になる。多人数の集団においては、バズが気軽なおしゃべり小集団としての活動に流されることなく、課題関係の発展の成果があがるように、メンバーの共通性と差異性が交差するような集団の構造化が必要であり、3章で示すようなグルーピングのさまざまな技法の展開がなされるべきであろう。

(2)ウォーミングアップ活動は心理劇では、参加者が自発的・創造的に舞台上でふるまえるようにするために非常に重視されているが、バズにおいても、初めてバズグループになったメンバー同志にいきなり課題を指導者が外から提示するのではなく、ウォーミングアップ的活動が必要かつ有効な場合もあろう。一般には、自己紹介などがウォーミングアップ効果を含んでいると考えられるが、メンバー同志の人間関係の親密化をねらった、簡単なゲーム的活動の展開が期待される。例えば、自己紹介活動でもバズメンバー同志で二人ずつのペアをつくり自己紹介をした後にペアが集まってそれぞれのペアの一人が他方の自己紹介をすることで、対人関係を深め、バズメンバーのウォーミングアップ効果を高めて次の段階の課題活動へ発展した実践もある。

また、指導者のノン・バーバル（非言語的）な役割演技を集団で観客の役割を取って見るという共通体験の後に、その演技をどのように認知したか（状況認知体験）というバズを行なう実践も、バズメンバーの共通性と独自性が発揮されやすく役割取得の要易なウォーミングアップ活動として有効である。

②の展開段階には指導者のきめ細かで、多様な活動を促進するはたらきかけが必要で。

大集団、小集団（バズグループ）、個それぞれの単位での活動が相即的に発展することをめざす集団活動の指導者は、集団活動を促進する次のような「3つの機能」^⑨を場面に応じて果す必要がある。

<方向性機能>集団活動（大集団、バズ）の全体をと

らえ、活動の方向、課題を明らかにする機能

<関係性機能>集団活動（大集団、バズ）において、メンバー間の関係、バズグループ間の関係、場面との関係など、さまざまな関係の発展を促進する機能

<内容性機能>集団活動（大集団、バズ）におけるメンバーたちの安定、自発活動を促進し内容をつくっていく機能

全体活動やバズが充実して展開する状況では、これらの3つの機能が充分に働いている。方向性機能は、主として物（集団、バズ課題）との関係、関係性機能は主として人（メンバーたち、指導者）との関係、内容性機能は主として自己（個々のメンバー）との関係の発展を促進している。

集団活動が、自己関係、人関係、物関係がかかわり合いながら発展する接在共存状況の展開する活動となるためには、これらの3つの機能が不可欠であることをふまえた、指導者の集団運営が期待される。

(5)のバズ討議中には指導者には、以上のような機能にないつつ、個、小集団、集団の相互媒介的な関係創りがめざされます。指導者の集団運営のための技法としては、アナウンスの技法、ストップの技法、時間操作の技法などがある。（3章で技法解説を述べる）

(6)の各バズグループの討議内容の発表時には、大集団でバズグループの数が多ければ、多い程、他グループ発表を聞く活動が散慢になる傾向がでてくる。これは長時間の役割固定（聴く役割だけの取得、や各バズグループの発表内容の共通性ばかりがめだち、くり返しが多いと把握されるためであろう。発表者の中には指導者に向けてのみ発表する者がいるが、発表とは、指導者も含む集団全体に向けてするものであるという意識を確立させたい。また、「前のグループと同じ内容なのですが」「他のグループと似てきちゃうのですが」などと前置きをする発表者の発言にたびたびであらうものであるが、指導者はどのグループの発表内容にも他と共通な部分と独自の部分があるものであり、前述のような前置きは必要ないこと、そしてたとえわずかな量であっても自分たちのグループの活動の成果としての独自性を探しだし、そこに力点を置く発表のしかたを指導すべきであろう。

自分たちのグループのバズにおいてのみでなく、他グループのバズの成果を聞くことにおいても、思考の発展があり、バズの発表のしかた、発表の聞き方にも、課題を深めるためのさまざまな心理劇的技法を中心とする技法がある。（ディスカッションドラマ（discussion drama）の技法、ドラマティゼーション（dramatization）、各グループの独自性焦点化の技法等、3章において技法

説明を述べる。)

③の発展最終期には、各グループの発表後の活動が対応し、色々な活動内容の組み合わせがある。他グループの活動内容の成果を知った上で、再びバズを行ない自分たちのグループ内の課題の掘り下げをねらうこともできる。

また、最後の活動として、バズ・グループを解体し、集団全員が各自、個別自己活動として課題関係を発展させ、自己における感想・発見、課題をきちんと成立させ、文章化することで締めくくることが出来る。

この段階では、指導者の理論化や実践と理論の対応関係の明確化、統合化などの総括的活動がどこかである程度なされる必要がある。

さらに、バズによる課題の深まりが、それから以降の未来の実践レベルに連続的に活かされることをねらって、これからの実践場面での新しい認識と行為の展開場面を心理劇的に演じてみるようなフューチャー・プロジェクト(Future Projection)の技法も有効であろう。

この段階においても、さまざまな活動の組み合わせにおける個と小集団(グループ)と集団との相互媒介的關係発展がめざされるが、特に⑨の個別における自己活動がきちんとなされることが不可欠である。

次の文はバズの後にバズについての感想を個別に記録するという指導者から提起されたバズ課題以外の2つ目の個別活動課題についてのある学生のノート内容である。

「人も自分と似たようなことを考えているのだということがバズをしてわかり安心し、自分の考えを客観視することができる。また、自分が全く考えもしなかった事を人から聞くと、自分の考えが一方向的であることに気づいたりもする。自分の考えの浅さを感じ、人の考えの深さ、注意力に感心する。

そこにそれぞれの人の考え、物の見方を知ることによって、今までに知らなかったその人の一面を知ったり、自分と少しでも同じ考えを持っている人には、大いに共感したり、親近感を覚えることもあった。」

以上においてバズの発展段階に対応させつつ、それぞれの段階でのメンバーのかかわり方の特色や指導者に必要な集団活動を促進する機能について述べてきたが、どの段階においてもメンバー全員がメンバーと共に成長するために自己に確立すべき認識がある。

それは、小グループのバズやバズグループを解体した後の集団全体活動における討議の成果についての認識と自己の変化への認識である。それらの成果がどんなに小さな、ささいな、あるいは平凡な内容であっても、人と共にかかわり話し合い、創った成果として尊重し、人と

共に考え、かかわる過程での自己や人の認識・行為のわずかな変化・発展をも意識化できることである。

バズにおいて、他の人の発見や考察を聞いていて、「そんなことは前から私も知っていたし、実行していたことだ」とか「あたりまえすぎて、つまらない発表だ」という認識をするメンバーばかりでは個と小集団の相互作用が発展しないであろう。

我々は、バズ以外の普段の日常生活においても、「そう人から言われれば、以前から知っていたように思えるあたりまえのこと」でありながら、人に言われなければ意識化されずに体験を流してしまっていることも意外に多いものである。自分だけでは思いつかないことが、人との関係で新しく意識にのぼっても、初めから自分が知っていたかのように思ってしまうがちな認識のしかたのメンバーもいる。そういうメンバーは、他の人を尊重し、バズの共同活動としての成果を尊重することができていないことになる。

バズや他の共同活動において「他の人といることによる発見・その人らしさの尊重、他の人として、そこに生成される事実を関体的にとらえ、新しい発見のできること」^⑩が保育者としての成長をめざす者に不可欠な認識である。

(3) バズによる保育者の資質養成

バズは保育者の資質の基盤づくり「認識の形成」に不可欠な小集団活動である。バズは参加するメンバーの自発性、協調性、責任性を必要とする活動であるが、特に保育者養成活動のためのバズにおいては、表2のような段階をふんだ認識の形成と対応させた展開をめざしている。

また、これらのねらいに基づく養成活動は、2年間5期に渡る教育実習内容とも対応しつつ展開し、具体的なバズのテーマも決められてゆくものである。

表2

資質養成活動のねらい(認識の形成)	ねらいと対応する関係体験	具体的活動内容
1. 今、この集団状況を、他者と共に担う資質(一般共通性認識)	豊富な共通体験 自己と他者の共同創造活動の成果を認識し、尊重する。	・心理劇体験の共通とその演者・観客体験についてのバズ
2. 個々の独自性を尊重する資質	自己における独自性の発揮と他者における個別差異性の認識	・実習記録やレポートの読み合わせ ・心理劇の演者・

資質養成活動のねらい(認識の形成)	ねらいと対応する関係体験	具体的活動内容
(個別差異性の認識)		観客体験についてのバズ ・自己の行為・認識における変化を意識化したレポートの作成と発表 ・バズ(感想・発見・課題)における自他の独自性を発見する。
3. 個別性を統合し、状況を新しくしていく資質 (典型類似性の認識)	個別性の交差 自他の共通性・独自性を統合的に認識する。 理論と実践を対応的にとらえる体験	・記録やレポートを基盤とした課題研究のためのバズ ・個々の発見や課題を分類したり(類的把握)、表化する(相対化)する共同活動

2. バズにおける技法の展開

バズを中心とする教育集団活動は、一つの課題を探究する劇場面としてとらえられる。教室は舞台であり、参加者は課題関係の発展のためにさまざまな役割を分担していることになる。課題状況の進展に対応させて、次のような特色をもつ心理劇(Psycho drama)の理論・実践において成立・発展している技法の多くをバズに活用することは、きわめて有効であると考えられる。

(2) バズの発展段階と技法の対応 表3

経過	技 法	活 動 内 容	考 察 (効果)
導 入 期	1. グルーピングの技法		
	a ソシオメトリック・グルーピング	a グループ分けの際、コアになる人を数人選び、次々に、全員が人数とメンバーを考えながら(選択理由を言いながら)移動する。	<ul style="list-style-type: none"> ・グルーピングはウォーミング・アップ活動でもある。集団構造により、グルーピングの方法も吟味されるべきである。 ・教室や座席の並び方など物理的物関係の規定性を考慮する必要もある。
	b 課題選択によるグルーピング	b 取り組みたい課題を選択した者同志でグループをつくる。	
	c 座席操作によるグルーピング	c 座席や番号によるグルーピングは固定しがちなので、そこに意図的な部分のメンバーチェンジ操作をする。	
	2. ウォーミング・アップの技法		

(1) 心理劇とは

心理劇とは、いま、ここで、新しくふるまうことが重視され、自発的、創造的にふるまうことのできる人格形成がめざされる。心理劇では、そこに成立している対人関係が発展し、そのことにおいて、関係の担い手としての個人がのび、その個人がのびることが対人関係を発展させるという体験、その体験を豊富にすることができる方向へ社会を変革していく。その意欲が、関係体験を通して育ち、それを実現する態度が、いま、ここで新しくとれるようにする。ここに心理劇の大きなねらいがある。

心理劇の創始者はモレノ(J. L. Moreno)であり、日本では、「心理劇研究会」が発足(1956)し、臨床、教育、矯正、看護、医療関係、産業活動、日本心理劇協会(1961~)などの活動のなかで、独自の日本の心理劇が発展している。

筆者は日本心理劇協会に所属し、これらの活動に多くを学んできたが、バズに心理劇の理論、技法を活用することによって次のような特色をもつ実践活動が展開可能であると考えられる。

- 全員が何らかの活動に必要な役割をになつて活動を進めることができる。(見ているだけのかかわり方も観客的役割の取得となる)
- 話し合いのみでなく行為レベルの劇場面を含めて展開することにより、豊富な関係体験が生まれ、メンバーの役割のとり方、かかわり方の可能性を拡大でき、認識の変革技法の発見にもつながられる。
- 人間生活に対応する生活縮図の場面(保育の集団状況等)を構成でき、その場面の共有をもとに、バズを発展させると、体験(演者、監督、観客)的事害に即して発見・考察を深めてゆける。

経過	技 法	活 動 内 容	考 察 (効果)
導 入 期	a 対人関係発展中心のウォーミング・アップ イ ノンバーバル・ドラマ (nonverbal drama)	イ ノンバーバル・ドラマをゲーム的に行ない、その観客・演者体験について気軽に話し合う。	イ ジェスチャーゲームのように気軽に楽しく展開させながら、場面の共有によるウォーミング・アップ効果をねらう。
	ロ 物媒介, 対人関係発展の技法	ロ メンバーが輪になり、ぐるぐる物をまわしたり、みたてて物をまわしたり、渡す人と受け取る人とが物とかかわりつつの心理劇を、順に展開する。	ロ 物を媒介にすることで、自発性が高まる。物の対人関係における機能が把握できる。
	b 課題関係発展中心のウォーミング・アップ イ 自己紹介による共通点発見ゲームの技法	イ 自己紹介を隣り合う2人ずつがペアになって行ない、次に、バズグループ内で自分のペアになった人の他己紹介を相互に行なう。そしてメンバーに共通に成立している何らかの共通点発見ゲームを行なう。	イ 2人ずつのペアの関係をまず発展させ、それを基盤にしたバズメンバーの凝集をねらう。
	ロ 状況認知体験についてのバズの技法	ロ 人の(指導者, 学生)ノンバーバルな役割行為場面を全員が観客として共有し、どんな場面のどんな人のどんな活動として把握したかについて話し合う。	ロ 課題の共有がしやすく、メンバー同志の認知の共通性や独自性が把握しやすい活動である。
展 開 期	a 物関係操作の技法	a 記録用紙や実践記録資料絵本等の共有、話しずらそうな座席の並べ方のグループには空席の向きや問題の調節をうながす。	a 集団活動に共有物が投入されたり、座席を調節することで課題関係への意欲が促進される。
	b 活動の経過の段階化(節づけ)の技法(方向性機能)	b 集団やバズで「これまでやったこと」「今、やっていること」「次に取り組むこと」などを段階的に整理して、現在から先への活動の方向性を明示する。(「今、～まで進んできましたね」「そろそろ、まとめに入って下さい」)	b 活動の成果をふまえて、先へのひとつしをたて、意識的に課題に取り組む態度の促進
	c 指導者が一時的にバズメンバーになる技法(内容性促進機能)	c バズグループのメンバーになり、皆と違った視点からの意見をのべたりする。	c 指導者がメンバーになることでバズが活発化、視点が広がる(演者的メンバー、監督的メンバー)
	d アナウンスの技法(関係性機能)	d いくつかのバズグループの話し合い内容、論点を全体集団に知らせる(「今、このグループでは、～についての意見の相違で討議が白熱しているところです」)	d いくつかのグループの活動内容を焦点化し、全体に知らせることで、バズグループ間関係媒介によるバズグループ内の活動が広がり凝集する。
	e ストップの技法(関係性機能)	e 一つのグループのバズに焦点をあてるために、全体のバズを一時ストップさせて観客の役割を付与し、その一つのグループのバズを	e 一定時間、他の一つのグループのバズを聴取することで、dと同じような効果がある。聴きながら、自分もバズメンバーに

経過	技 法	活 動 内 容	考 察 (効果)
展 開 期	f 時間操作の技法(方向性機能)	全体集団が聴取できるような大きな声で話すようにして続行させる (何分か後に、また、全体集団のバズを再開する) f 「あと一分でバズを区切ります」「～分たちました。そろそろまとめに入って下さい」「まとめは、あと何分位必要ですか」など活動時間についての方向性を明示する。	なったつもりで自己内で発言する演者的観客にもなる。 f バズが凝集し、しかも、成果がきちんとさせるような時間の調整は、全体集団の状況をとらえつつ常に行なう必要がある、話が出つくしてしまう前にストップし、その先の全体集団での活動意欲につなげる技法もある。
発 展 終 結 期	1. 発表の技法 a 各バズの発表内容へのコメントを挿入する技法 b 質問グループ指定の技法 c ドラマによる発表技法 d 役割分担のディスカッション・ドラマ (discussion drama) による発表技法 e 文章化記録活動による認識化促進の技法	a 各バズの発表が長時間続く時、一つの発表が終る度にその発表内容の独自性や全体でさらに取り上げたい問題提起をピック・アップするフィード・バックをさしはさんで変化をつけた進行をする。 b 指定討論者を設定するように、一つのバズグループの発表に対して、質問するグループをあらかじめ設定しておく。 c バズの成果をバズグループ毎に、ドラマで演示する (Dramatization) と共に、ことばでも発表する。 d それぞれのバズグループの代表者が、それぞれのグループの意見をになう討論者になり、舞台の上でバズを行なう、(メンバーチェンジもありえる) その後各バズ・グループに代表者はもどりバズを続ける。 e バズや全体化集団の活動の後に、個別な自己活動をしめくくりとして位置づけ、これらの活動における自己に成立した感想・発見・課題を意識化し整理し、自己の変化に気づくための文章化記録活動	a バズの成果の独自性の認識ができ、全体化した時の活動意欲を高められる。聴く役割ばかりだと単調になるので、指導者のコメントがよい刺激になりえる。 b 聞く役割のみでなく、聞いた後に質問する役割にもなることで、グループ内が凝集し思考も発展することをねらい、発表グループと質問グループ間の関係も発展する。 c 行為レベルで、他のグループへ演示することで、演者体験、観客体験を媒介とする認識、行為レベルの発展を促進する。 d それぞれのバズグループの論点や独自性が明確化されることにより課題関係が発展する、視点も広がる。 e 集団媒介による個々の発展を確認し、ただのおしゃべり活動に終らせずに、課題活動の個々の深化をねらう

3. バズの具体的展開と過程分析

次に、一年次と二年次の講義の中で行なったバズの実践例を一つずつピック・アップし、具体的展開における過程分析、技法分析を付記する。

(1) 絵本内容についてのバズ

これは「児童福祉」の講義の中で、障害児の統合保育、教育についての問題意識を深めることをねらって、それらに関する教材となる絵本を三冊ずつ配り、それらの絵本についての感想、発見、課題を明確化するバズ・

セッションを行なった。

絵本「わたしたちのトピマス」(偕成社)

「わたしたちのトピマス大きくなる」(偕成社)

「はせがわくん きらいや」(スバル書房)

①指導者 ⑤学生

段階	活動の経過	過程・技法分析
導入	①座席による7人ずつのバズグループピング ①バズ課題と、絵本についての説明 Tバズグループ内の司会者と記録者を決定	人数と本の冊数から1グループの人数を決定 バズ法に慣れる段階なのでランダムに出席番号による役割決定をしよう。
展開	⑤絵本を読む役割、見る役割をどのように分担するか、各グループで相談 ⑤役割交代しながら、グループで絵本を読み進める。 ①気づいたことはメモしながら見ることを提案する。 ①バズからはずれがちなメンバーへの個別の働きかけ。 ・話し合いがしやすいように座席の並べ方を変えることをあるグループへ提案 ・「このバズでは～について話していますが他のグループも～について考えてみて下さい」 ・「大体、ほとんどのグループが3冊を読み終えたあたりですね」	活動の大枠は①が決められたので、細かな進行については、各グループの自主性にまかせる。 ⑤絵本を読む役割の訓練にもなる。見る役割の人は、読み方についての意見も述べる。 一冊読み終えるごとに、グループ内で自然に拍手が湧き起こるところがある。 (内容性、関係性機能) ・バズがしやすいように、座席や身体へ向きを調整することが、バズの凝集を高める。 ・アナウンスの技法、一つのグループの独自性に焦点をあて、グループ間関係の発展をねらう。他のグループのバズ内容を知ることによりバズの視点も広がる。 課題の進行段階と時間との関係の意識化を誘う。バズ活動の節づけになり、新しい課題を明確化する。(方向性機能)

段階	活動の経過	過程・技法分析
展開	⑤バズ・セッション(絵本の内容についての質問を①へする) ①は全体の集団状況を把握しつつ、個々のバズグループへ必要に応じてかかわる。 ・「そういう見方もあるのね、なるほど面白いですね」 ・「私は……と思う」 ・「このグループは“きらいや”の中味について話しています」	外国(スウェーデン)の統合保育のシステムについてさらに詳しく知りたいグループは個別にTへ質問する。 間接的かかわり(メンバーに即しつつ、活動を促進する) 内在的かかわり(メンバーになる) ・一つのグループの焦点テーマを全体化するアナウンスの技法
終結	⑤バズ内容をレポート用紙にまとめ提出(バズメンバー名記入)	1コマ(90分)では少々時間が不足し、2,3のバズグループが授業時間が過ぎても、バズを継続していたので、バズのレポート提出期限を延長する。

次の、講義の時間に、前回は行ったバズについてのレポートの一部を読みあげ、指導者としての意見・感想と内容についての補足を行なった。

バズグループのレポート例(部分的抽出内容)

絵本「わたしたちのトピマス」について

- ・普通の子とも障害者の触れ合いを多くすることが大切だと思った。そういう環境を作っていかなければならない。
- ・親がトピマスを施設に入れようとした時に、兄弟が反対した所に感動した。
- ・本の文で「普通の子と普通でない子がかかわらない状態では、普通でない子は普通の子から見て、いつまでたっても、異常に見える」ことは改まらないと思います。

絵本「はせがわくんきらいや」について

- ・自分のことをこれだけ素直に書き表わせるのだから著者は精神的に強い人だと思った。
- ・独特なタッチの絵の中で、ヒ素入り粉ミルクに対する憎しみが現われている。友だちは「はせがわくんきらいや、きらいや」と言いながら、気になってほっておけない優しさも本物だし、「足手まといになるからきらいだ」と時に思う気持ちも正直なものだと思う。

(2) 共通実習課題についてのバズ

この課題は2年次後期の実習前に実習中の研究課題として筆者が学生に提起したものである。その内容は、「ごっこにおいてとらえられた約束ごと（ルール）についての発見と考察」と「遊びにおける人形とのかかわりについての発見と考察」であった。実習後、これらの共通の実習課題について3回にわたったバズを中心とした共同研究活動の経過を次に示す。

尚、このような、実習課題は1年次のゼミなどで学生に多く成立した課題や疑問と筆者自身の研究課題とを交差させた範囲で毎年違った課題を設定するようにし、実習後の共同研究活動の成果が明確化され、共有されるこ

段 階	活 動 経 過	考 察
〔1回目〕 ①個別活動課題についてのレポート作成	30~40分で実習ノートやメモを資料に加えて、自己の実習体験における課題についての発見と考察のレポートをまとめる（実習後）	実習中は、レポートを完成させておくことは時間的に無理なので実習後に、その時間を設定する個別活動により、まず各自の課題意識を確立することをねらう。
②選択課題別グループピング	2つの課題の中から一つの課題を選び、同じ課題を選択した者同志で7, 8人のバズグループを作る。Tは、同じメンバーで固定しないように部分的な座席移動によるメンバーチェンジを指示する。	2年後期の固定的対人関係に新しい変化を導入し、バズを活性化するねらいによる。
③バズ活動の進め方について説明 ④バズにおける役割分担の決定	各グループでメンバーのレポートを発表し合った後に、課題の中にいくつかの焦点をつくり、バズでより考察を深めてから発表するという予定をふまえての各自のレポート発表活動へ（司会者、記録者、発表者の役割）	大枠の課題のみが設定されているが、その中の焦点となるべき課題は各グループが設定することにより各グループの主体性、独自性の発揮を促進する。
⑤バズ	進行は各グループの自主的運営にまかされる。	2年の後期であり、バズ体験も豊富なので、独自な自主的運営が展開可能となる。

段 階	活 動 経 過	考 察
〔2回目〕 ⑥活動経過の確認と今回の予定についての説明	前回、どこまで進んだか、今週と来週にどんな活動が予定されているかの確認をする。	経過をおさえることにより、現在とこれから先の見通しを立てながらの各人の役割責任の遂行がなされることをねらう。
⑦課題の焦点つくりのためのバズ	自分たちのグループとして、皆に興味があり、焦点となる課題の決定のためのバズを行なう。	各グループの独自性の発展
⑧各グループ別の個別課題についてのバズ	各グループで決めた独自の課題に基づいて、メンバーがバズを行なう。	時間調節の技法全体の活動の進捗を知らせることにより、個々のグループが活動の進捗調節を自主的に行なうことを促す。
	⑨「たいだいのグループが個人のレポートの発表は終りグループ課題の決定の活動に移っていますか」	Tの外接的かかわり方 Tの内接的かかわりによる内容促進機能
	⑩「焦点が決まりましたか。もうすぐ、しぼれそうですか」と各グループをまわっているグループへは援助的にかかわる。	時間枠の明確化
	⑪「課題がどこのグループでも煮つまってきたようですね、時間はあと～分位あります」	役割責任明確化 時間枠の設定は一方的に決めるのではなく、全体状況や各グループの希望を受け入れつつ柔軟に判断する。バズでは、グループにより進展状況が異なってくるので、時間や発表順の調整な
	⑫「このグループの発表者は誰ですか。あと～分位したら、そろそろ、このグループから発表に移りましょうかそれで時間は足りませんか」	

段 階	活 動 経 過	考 察
⑨発表	<p>2回にわたる共通実習課題の研究活動の経過を段階づけて明確化し、発表場面へ移る。</p> <p>⑩「今回、全部のグループは発表しきれませんので、来週もその続きをします」(1/3のグループが発表を終えた時点で時間切れとなる)</p> <p>すでに発表を終えたグループには次回は指定討論者の役割を付与する予定を知らせる。</p>	<p>どが必要である。</p> <p>今までの活動成果を確認し来週の活動の見とをしをたてて、今ここでの活動に集中する態度を形成する。</p>
(3回目)	<p>どのグループも、課題や発表内容において、他のグループとの共通性を意識しすぎて、発表者が「前にも言われたことなのですが」、「同じになっちゃうんですが」という前置きをしがちなので、Tはそれは必要ない語句であることを説明する。</p> <p>⑪「どこのグループの活動内容も全く同じになることはない。それぞれ共通な部分があれば、独自の部分もあるのです。それぞれのグループの共同活動の成果を尊重しつつ発表しましょう」</p> <p>⑫は他のグループの発表を聞く、受身的活動の連続に変化をもたらすように、グループ間の比較や質問そのグループの独自性についてのコメントを挿入する。</p> <p>発表順が一番終りの方のグループはそのグループの独自性に力点</p>	<p>グループ間関係によって、自分のグループの共通性独自性を共に認識できるようになる。</p> <p>発表者には自分のグループの活動成果を尊重する態度が必要である。</p> <p>他のグループの発表を聞く役割が散漫にならないように変化をつくる。</p> <p>狭い範囲での詳しい発表をしてもらうことで</p>

段 階	活 動 経 過	考 察
	を置いた発表をしてもらう。	独自性がより明確化される。
⑩まとめ	<p>3回にわたった、共通実習課題についての研究バズ活動の経過を述べる。</p> <p>⑬指導者として、とらえられた、1年次と2年次のバズの発展のしかたの違いについて述べる。</p> <p>発表内容の総括と補足</p>	メンバーとしての自主性、協働性の発展研究活動の成果の確認
⑭各グループ毎に作成したバズ・レポートの回収	バズグループメンバー名を明記してもらう。	

とをめざしている。

おわりに

今回は、これまでの保育者養成活動の中の特にバズ・セッションのみに焦点をあててまとめたが、今回は、行為法、心理劇の実践をまとめ、保育者養成活動のあり方を続けて考察してみたい。

(研究協力者) 十文字学園女子短期大学幼児教育学科 在校生、卒業生

〔引用文献〕

- ①「新教育心理学辞典」塩田芳久，金子書房
- ②「幼児の性格形成」松村康平，日本私立幼稚園協会編，ひかりのくに社
- ③「保育ノート」（月刊紙）松村康平，ひかりのくに社
- ④「保育者の資質と研修」（現代幼児教育全集10）岡田正章編，ぎょうせい刊
- ⑤「臨床心理学」竹内硬，松村康平編，朝倉心理学講座5，朝倉書店
- ⑥「児童臨床学」（石井哲夫編）の「3. 児童臨床の方法」松村康平，垣内出版株式会社

〔参考文献〕

- 「がんばれ実習生」玉成保育専門学校，教育，保育実習プロジェクト班
- 「バズ実習の理論と実際」塩田芳久，梶田稲司編著，黎明書房
- 「共に育つ保育者の養成 その1」大戸美也子，小野真理子，日本保育学会第34回大会研究論文集